

前言

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9592>

出版情報 : 中国文学論集. 33, pp.1-2, 2004-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

高校国語科における漢文教育の現状と課題…前言

竹村 則行

『中国文学論集』の小特集として、従来の中国文学論考とは些か異なる高校の漢文教育に関するテーマを組むに当たり、編集に関わる者としていささか説明を加えたい。

二〇〇三年九月二十三日、第二〇六回中国文芸座談会において、我々は青雲高校工藤玄之、北九州高校藤永容子の二教諭の高校漢文教育の実践報告による標記のシンポジウムを持った。当日は、入試の動向が漢文教育に大きな影響があること、高校生は漢字漢文に強い興味を示していること等の報告があり、筆者は、大学の中国文学科の裾野たる高校漢文教育の実態に対する無知を痛感した。近年国語力の低下や漢文教育の衰退が叫ばれる中、このシンポの持つ意味はかなり重大であると思われる。そこで、他に佐賀西高校坂田慎一、宇都宮女子高校陶山由紀子の二教諭の投稿を募り、今回の小特集となった。まずは高校漢文教育現場の実情を知り、将来の改善方法を模索したい。

一九七〇年、岡村繁先生的首唱によって、新たに学術論集として出発した『中国文学論集』は、今号で三十三号を迎える。三十年はあたかも一世代に相当する。国立大学から国立大学法人へ衣替えした九州大学が、桑田変じて滄海と成る。例え通り、福岡市西郊の玄海を眺望する『桑原』地区へ移転するなど、三十年前に誰が予想したであろう。今回の九大のキャンパス移転には内部改組が絡まる。大学が如何に経営的に自立できるか、如何に社会に役立つか、いわば大学の営利企業化が当今の法人化の目標である。ここで関係者の見識が問われるのは、営利とは縁薄い文学部への対応である。文飾を主とする文学は基本的に飾り・遊びの要素を持ち、音楽や絵画等の表現芸術と同様、人間の豊饒な精神生活を表現するものである。文学部の無い総合大学は、大濠公園や博多湾を実利の為に住宅地化した福岡市のように、味気なく息詰まる空間となり、生気が失せるであろう。文学部の存在は、実は

良識ある。大学活性化のための必須条件なのである。事情は、漢文教育にもほぼ同様に当てまる。

大まかに言つて、江戸期の文人の素養は漢学であり、明治期に洋学がその上に導入され、第二次大戦敗戦後は、今日に至るまで米国型の実利・合理・便利を追求する学問が一世を風靡している。九大の移転や改組も他大学と同様、モデルケースは全て米国である。そしてその結果、実用的な英語教育偏重のありで、漢文教育は軽視ないしは疎外され、今や虫の息であるというのは悲觀しすぎであろうか。抽象的な喩えだが、文化の担い手たる人材の育成は、樹木の成長と同様、三十年を一単位とし、百年を一サイクルとする。つまり、現在の成果は過去の明治教育の賜物なのであり、現在の教育は百年後に結果する。戦後日本が奇跡の経済復興を遂げた精神基盤は、実に明治期に培われた人々の強固な思想であつた。漢字漢文は日本文化の強固な基盤であり、ひらがなや英語に代替できるものではない。偏向した思想教育に漢字漢文が使用された苦い過去は清算しなければならぬが、漢文教育の軽視ないし衰退が日本文化の軟弱化に直結することは、火を見るより明らかである。

炎天下の〇四年八月五日、千名の高校生に九大文学部を紹介する大学説明会が開かれ、我が中文研にも多くの高校生が来訪した。彼らの中国文化に対する関心の根強さはこの一事からも伺える。難字熟語の一括変換も楽々こなして、漢字はIT社会を見事に乗り切る構えであり、四大文明の一たる漢字文化は、どうしてなかなかかしぶとい。

筆者は旧来の漢文教育の復活を企図するものでは決していないが、新しい千年において、日本文化の基盤強化やアジアの伝統文化の理解のためにも、新時代に対応した漢文教育の整備が緊要である。この小特集が、そのための第一歩として、まずは高校の現場における漢字教育の実態把握に些かでも役立つことを願いつつ、前言に代える。